

2016 (平成 28) 年度エリザベト音楽大学大学院の

博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則 (昭和 28 年 4 月 1 日 文部省令第 9 号) 第 8 条およびエリザベト音楽大学学位規程第 12 条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	松浦美音		
学位の種類	博士 (音楽)		
学位記番号	甲第 17 号		
学位授与年月日	平成 28 年 8 月 3 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	A.B.フルステナウ『フルート演奏技法』op.138 (1844) における 運指表の研究		
学位論文等審査委員			
(総合審査) 委員長	教授	片桐 功	
	准教授	馬場有里子	
	教授	赤坂達三	
(演奏審査) 委員長	本学名誉教授	大代啓二	
	教授	赤坂達三	
	教授	片桐 功	
	准教授	馬場有里子	
(論文審査) 委員長	本学名誉教授	大代啓二	
	准教授	馬場有里子	
	教授	片桐 功	
	教授	赤坂達三	
	本学名誉教授	大代啓二	

論文内容の要旨

フルートが現在のシステムとなったのは、周知の通りテオバルト・ベーム Theobald Boehm によってである。それ以前のものとして、16 世紀後半にはルネサンスフルート、1670 年頃になるとバロックフルートが登場し、その後様々な改良を重ね、1846~47 年に現在のベーム式フルートが開発されたのである。ここで私が特に注目したいのは、バロックフルートからベーム式フルートに発展するまでの、その過程である。この約 180 年の間は、バロックフルート、バロックフルートにキーを取り付け改良を試みた多キー式フルート、ベーム式フルートの前進となるもの、そしてベーム式フルート等、様々な楽器が混在した。アントン・ベルンハルト・フルステナウ Anton Bernhard Fürstenau も、まさにそうした時代を生きたフルート奏者・作曲家である。様々な楽器を使用する選択肢があった中、フルステナウは、多キー式フルートの中の 1 つ、9 キー式フルートを生涯愛用し続けたわけだが、一体彼が 9 キー式フルートに

何を求め、どのような可能性を見出したのか紐解くと同時に、彼がこの楽器のために残した2冊の主要な教則本、3つの論文、そして多くの練習曲や作品の中から、とりわけ2冊目の教則本『フルート演奏技法』に焦点を当て、その教則本の約3分の1を占めている運指表に注目し、彼の意図を探り研究を行うことを目的とした。

第1章では、フェルステナウの生涯を振り返り、著作と作曲作品のリストを作成した。研究を進めるにつれて、1つ目の論文「フルート演奏に関する所見」はフルートに対する一般論を述べているにすぎないが、2つ目の論文「フルートとフルート演奏についての所見」は、1冊目の教則本『フルート教程』に繋がるものであるということ。また、3つ目の論文「今日のフルートの構造の歴史的批判的研究」は、2冊目の教則本『フルート演奏技法』に繋がるものであるということが、明らかになった。

第2章では、『フルート演奏技法』の全体構成を紹介し、序文・第1巻・第2巻・別冊練習曲、それぞれの要点をまとめた。

序文は、著者自身のものと、ハレのザーレ湖畔で歌手・評論家としても活躍していたグスタフ・ナウエンブルクのものが存在した。1冊目の『フルート教程』と2冊目の『フルート演奏技法』の関係は、改訂ではなく、補完、補足であり、あくまで『フルート教程』で基礎教育を終えた人向けの芸術的な教則本が『フルート演奏技法』だということが、著者の序文より読み取れた。

第1巻は、「フルートとその構造」と題が付けられ、第1部「手引き」と、第2部「フルートの個々の部分とその構造」の2部構成であった。第1部「手引き」では、フルートの簡単な歴史、フルート構造についての考察、更に、この当時最新とされていたバーム式フルートについての見解が述べられていた。第2部「フルートの個々の部分とその構造」は、構造上の面から見たフルートのそれぞれの部分を個別に紹介していることがわかった。

第2巻は、「フルート演奏論」と題し、演奏者の立場からフルートの様々な奏法に対する彼の経験や考え、それに伴った練習方法などを交えて述べられていたため、本文に掲載されている譜例も交えて要点をまとめた。

別冊練習曲は、12の練習曲と題しそれぞれに副題がついていた。第2巻「フルート演奏論」の中で随所に登場する、演奏法を示す特別な記号や運指を示す数字が、この練習曲の譜面上にも記載され、本文との連携を図っていることが明らかになった。

第3章では、まず、フェルステナウが愛用した9キー式フルートのキーシステムについて詳細に述べた。キーには2種類あり、元々閉じていて指で押すと開くキーのことを閉キー、元々開いていて指で押して閉じるキーのことを開キーと呼んだ。フェルステナウが『フルート演奏技法』の中で掲載している運指表は、結果としてトーンホールが閉じた状態になっている部分を●、開いた状態になっている部分を○で表している。この場合、演奏者が頭の中でトーンホールの開閉の種類を判別し、●と○の意味合いを確認した上で、指を使用するのかどうかを考える必要があった。一方、現在、私達がバーム式フルートの運指表で慣れ親しんでいる●と○の意味合いは、トーンホールの開閉に関係なく、演奏者が指を使ってキーやトーンホールを押す部分を●、押さない部分を○で表している。そこで、フェルステナウが残した「諸音のための基本運指表」、更に「奏法に絡む特別な運指表」として「トリルの運指表」「ターンの運指表」「指によるヴィブラートの運指表」「ポルタメントの運指表」を、私達がバーム式フルートの運指表で慣れ親しんでいる表記に書き換え、それぞれ運指表を新たに作成した。それは、現在私達がバーム式で慣れ親しんでいる運指の示し方で表記することで、現在フルートを演奏している私達により分かり易くするためであった。

第4章では、1冊目の教則本『フルート教程』に掲載されている運指表との比較検討を行い、『フルート演奏技法』の持つ意味や役割を、運指表という観点から探った。運指の数を比較してみると、「諸音の基本運指表」は60種類から138種類へ。「トリルの運指表」は、87種類か

ら122種類へ。ターンとポルタメントについては、『フルート教程』の本文の中に演奏法の表記はあるものの、運指表の掲載はなかった。そして、指によるヴィブラートについては、本文中に演奏法の記載すら見当たらなかった。運指表という観点から見ても、フルステナウが『フルート演奏技法』の序文で述べているとおり、『フルート教程』は主として初歩教育を考慮して書かれたもの、そして『フルート演奏技法』前者を補完し、芸術的により高い段階にもたらそうと目論んだものということが明らかになった。

以上のように、フルステナウは『フルート演奏技法』という教則本をとおして、愛用し続けた9キー式フルート自体がもつ特性を最大限に生かすために、あのように莫大な量の運指表を生み出したのだと思われる。1つの音に対して複数の運指が割り当てられるフルステナウの運指法には、同じ音でもその曲調や性格によって異なる運指を選択し、微妙なニュアンスの差をつけることができる、という最大のメリットがあった。他方で、ベーム式フルートは、1つの音に対しほぼ1つの運指が固定され、より演奏し易くなったとは言うものの、9キー式フルートをはじめとする多キー式フルートの持つ、こうした音の微妙なニュアンスの表現という、大切な部分を失ってしまったのではないだろうか。『フルート演奏技法』における様々な運指表こそが、フルステナウ独自のフルートに対する情熱の賜物であったのではないかという結論が得られた。

審査結果の要旨

1. 演奏審査

この博士後期課程修了リサイタルでは、A. B. フルステナウの『フルート演奏技法』op. 138 (1844年)における運指表と彼にまつわる作品が取り上げられ、第1部で「9キー式フルートでのレクチャー演奏」が行われた。演奏者はまず『フルート演奏技法』の別冊練習曲より運指、トリル、ターンの各練習曲を演奏し、さらには《26の練習曲》より2曲を演奏して、9キー式フルートの魅力を十分に伝える事が出来た。古楽器の専門家による演奏にまでは至らなかった面も有ったが、短期間で9キー式フルートの奏法をよく習得しており、フルステナウの上質な音楽感とそれに伴った技術を窺い知ることが出来た。

続いて第2部で「ベーム式フルートで奏でる、A. B. フルステナウの作品」の演奏が行われ、<フルート協奏曲ニ長調>op. 84では、現在使用されているフルートでの演奏で、高度な技術と華やかな音楽表現で上質なフルート演奏が披露出来た。<「リュニオン」序奏と華麗なロンド>op. 115、<序奏と華麗なロンド>op. 132はフルステナウの得意とする2本のフルートとピアノで、構築的なプログラムであった。フルステナウの作品(楽曲)は、全体的に様々な音階やアルペジオが転調して行き、比較的ワンパターンなバリエーションで構成されてはいるものの、この修了リサイタルにおける演奏は作風のわりには楽曲そのものをより洗練し、工夫しながら、確かな技術と深い音楽性を兼ね備えており、素晴らしい演奏であった。

よって演奏能力において博士号授与に値するものとして審査員全員一致の合意を得た。

2. 論文審査

本研究は A. B. フルステナウの『フルート演奏技法』op. 138 (1844年) というフルート教

則本を扱ったものである。フルステナウはロマン派時代のフルーティストで、父親もフルーティストであった。ロマン派時代のフルートはまだバーム式フルートではなく、多キー式フルートが主流であり、フルステナウもとりわけ9キー式フルートで演奏活動をしながら数多くの作曲もし、さらには著作物も5つ残している。きわめて多彩な人物である。

本研究の研究対象は、その5つある著作物のうちの最後に書かれた教則本であったが、難解な昔のドイツ語を辛抱強く読破しよくまとめている。同書に関する先行研究は一点だけ存在するが、それは内容のごく一部を紹介しているにすぎない。著者はこの教則本の特徴をまとめるにあたり、5つの全著作を検討した上で、相互の関連性を検討し、5つの著作のうち主要なものは第3の『フルート教程』（1826年）という教則本と第5の『フルート演奏技法』という教則本で、残る3つのうち第1の著作（1822年）は雑誌の論文でフルート演奏に関する一般的な所見を述べ、第2も同じ雑誌の論文（1825年）だが、こちらは第3の『フルート教程』の1年前に書かれ、9キー式フルートを推奨するなど第3の『フルート教程』に繋がる論文だということ、また第4も同じ雑誌の論文だが分量が多く、第5の『フルート演奏技法』と同じ内容が随所に垣間見られ、第5の『フルート演奏技法』へ繋がるものであることを明らかにした。さらに著者の見解によれば、2冊の教則本のうち『フルート教程』は初心者向け、『フルート演奏技法』は基礎教育を終えた人向けの専門的で芸術的な教則本の関係にあるとのことである。

このことを裏付けるために著者は運指表に焦点を絞り、論文の第3章では『フルート演奏技法』に見られる運指表を巡る諸問題として9キー式フルートのキー・システム、諸音の基本運指表、奏法に絡む特別な運指表を詳細に取り上げ、第4章では『フルート教程』に見られる運指表との比較検討を進める。とりわけ最も説得力があったのは、諸音の基本運指表が『フルート教程』では60種類にすぎなかったのが、『フルート演奏技法』では138種類に拡大したという指摘であり、一方が初心者向け、他方が専門家向けとみなす根拠になっている。

論文の最後に、フルステナウの運指法は1つの音に対して複数の運指を当てることで、同じ音でもその曲調や性格によって異なる運指を選択して、微妙なニュアンスの差を付けるという魅力を引き出しており、それ故に1つの音に対してほぼ1つの音に運指を固定してしまうバーム式フルートを受け入れることができなかつたのであろうと結論づけているが、極めて妥当な納得のいく結論であると審査員一同判断をした。

問題点としては、ドイツ語原文の訳語が直訳すぎて、分かりにくいところがあり、もう少し滑らかな日本語（意訳）にできればなおよかったとの意見や、先行研究のハンス・ペーター・シュミッツの本から取った楽譜が不用意に掲載されていたところがあり、出典を明示するか、又は不鮮明でもフルステナウ自身の提示している楽譜に差し換えるべきとの意見や、また一部の審査員から9キー式フルートを実際に吹いた上での演奏者の視点も加味するとよりよかったのではないかとの意見もあった。しかしながらフルステナウについてこれだけ深く研究したことの意義は大きく、またオリジナリティも認められることから、全員一致でもう十分であろうとの判断に至った。

3. 総合審査

以上の演奏審査と論文審査を総合判断し、これまであまり顧みられていなかったロマン派時代の多キー式フルート研究に道を開き、今後この分野を研究しようとするものに十分寄与するであろうことから、全員一致で「博士（音楽） Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。